東京都千代田区

法務省旧本館

1895（明治28）年、明治の官庁集中計画の先駆けとして誕生した。唯一無二の重厚感を湛えた外観は、煉瓦造建築として国内最大級の規模を誇る。震災や戦災を乗り越え、現在は法務省の知的な拠点として活用されており、近代建築史を象徴する「生きた遺産」として高く評価されている。

撮影：山田新治郎

霞が関の官庁街を歩いていると、ふと周囲の空気が密度を増すような、静かな「重み」を感じる場所がある。重要文化財、法務省旧本館（法務省赤れんが棟）。これまで何度も目にしていたはずだが、真正面からその佇まいと向き合ったのは、今回が初めてだった。

この圧倒的な存在感は、どこから来るのだろうか。明治政府が招いたドイツ人建築家ヘルマン・エンデとヴィルヘルム・ベックマン、そして実施設計を担った河合浩蔵らが情熱を注いだ、ドイツのネオ・バロック様式の精髄がそこにある。赤煉瓦に白い花崗岩を配した意匠は、一瞥しただけで司法の厳格さを感じさせる視覚的な力強さに満ちている。

創建時の煉瓦壁が剥き出しとなった空間には、建物の「履歴書」が刻まれている。煉瓦を補強する鉄材の痕跡や、被災と再生を繰り返した構造の変遷を、間近に辿ることができる。細部にいたる意匠の復原プロセスを展示するこの場所は、保存技術の粋と、建築を守り抜こうとした人々の意志が対話する、深層の場である。

展示室の史料を辿れば、その姿を守り抜いてきた130年の苦闘が見えてくる。1895年の竣工から、関東大震災に耐えた鉄筋補強、戦火で外壁のみを残して焼失した悲劇。昭和の改修では耐震性を確保するため、煉瓦壁の上部を2mほど切り詰めて建物を軽量化するという、断腸の選択がなされた。しかし平成の保存復原工事では、失われた上部や屋根を忠実に再現。再び創建時の堂々たる高さを取り戻したのだという。

何より心を揺さぶるのは、この歴史の証人が今なお現役の執務室として鼓動を続けている事実だ。重厚な扉の奥では、法務総合研究所や法務図書館として、現代の法を支える実務や研究が日々静かに営まれている。赤煉瓦の壁に触れる時、指先から伝わってくるのは、積み重なった時間の確かな手応えだ。ただそこにあるという事実が、建築が刻む時間の尊さを何よりも雄弁に語りかけていた。